

チャーティストの「陰謀」とスパイ——ロンドン、一八四八年——

小 関 隆

第一節 トマス・パウエルとジョージ・デイヴ

イス

一八四八年当時、ロンドン近郊クロイドンのチャーティスト指導者として活動していたトマス・フロストの回顧録の中で「考えうる限り最低の悪人」と呼ばれ、またR.G.ギヤミジの手による最初のチャーティスト運動史には「忌まわしき卑劣漢」として登場するのが、チャーティスト運動史上最も有名なスパイ、トマス・パウエルである。一八四八年七月下旬から約一ヶ月間、彼はチャーティストらの地下活動に関する情報を治安当局に提供した。スパイの雇用は「非イギリス的」で

あるというのが、R.P.トムソンの表現を借りるならば「イングリランド人好みの信念」かもしれないが、一八四八年のロンドンでパウエルをはじめ多くのスパイが活動していたことは否定できない。そして、ベルチエムによれば、この年のロンドンでは「過去に比べて『スパイ・システム』は相当うまく運用された。⁽¹⁾」パウエルに次いでよく知られているのはジョージ・デイヴイスである。彼ら二人の提供する情報が治安当局に重視されたことは、彼らの報酬が他のスパイのそれを圧倒していることから明らかである。ロンドンのスパイには他にも、ベクスリーの弁護士ジョン・バタスン、セヴン・ダイアルズの彫金師チャールズ・ティルデン、

製靴工(居住地域不明)トマス・バレットらがいたが、量的に少なく、内容も多くの場合具体性を欠く彼らの情報に治安当局はほとんど興味を示さず、彼らには満足な報酬も与えられなかった。⁽²⁾

パウエルの職業は大工であり、一八三九年以来義理の兄弟にあたるフィンズベリーの建築業者スミスの許で働いていた。一八四八年三月ないし四月、「情報を収集し、当局に提供すること」を目的に、彼はクリップルゲイト地域のチャーティスト組織に加入した。職場の同僚リチャード・フェネルは言う。「私が彼に最後に会ったのは四―五ヶ月前「一八四八年三―四月」のことで、その時、彼は協会「全国憲章協会、以下[NCA]」に参加しないかと私を誘いました。自分は指導者の一人であるから私を推薦しよう、と。さらに、彼は私に自分を代表委員に推薦してくれないかと頼んできました。そうすれば、週に二―三ポンドを稼ぐことができるのだ、と」。こうして、加入早々からパウエルはスパイ活動のための布石を打ち始めた。⁽³⁾情報の収集・提供に加え、彼は「どんなことでもする」と思わ

れる者たちを執拗に扇動した。彼が治安当局への情報提供を始めるのは七月下旬のことだが、扇動活動はそのるか以前から取り組まれていた。この年のロンドンにおけるいわゆるチャーティストの「八月の陰謀」が「パウエルの策略」と呼ばれることがあるのは、こうした事情による。実際、パウエルは扇動にきわめて熱心であり、具体的には、首相ジョン・ラッセルや警官の暗殺計画の立案、家屋の焼き討ちの教唆、武器の配布等を行なっている。さらに、こうした活動にファーガス・オコナーらの著名なチャーティスト指導者を巻き込むことも試みられた。おそらく八月上旬、武装蜂起の準備のためのロンドンのチャーティスト代表者会議への出席を要請するオコナーへの書簡の中で、パウエルは脅迫のことばを用いている。「…もしも貴方に：チャーティスト組織の危険を分かち持つ覚悟ができていないならば、貴方は貴方自身の臆病の最初の犠牲者の一人となるでしょう。⁽⁴⁾」

「八月の陰謀」後の裁判では、パウエルの証言にどこまで信憑性を認めるべきかが大問題となった。彼の人

間性に関する多くの否定的な証言が聞かれた。「喉を切ってジョン・ラッセル卿が自殺した」といった類の嘘を頻繁に言いふらすパウエルは、職場では「嘘つきトム」と呼ばれていたのである。彼とは三年半の付き合いがあったトマス・オズボーンは、「たとえ宣誓していようが、あるいは死の床で発言されたとしても、彼のことを信じるつもりはない」と断言した。しかし、判事アールの見解は以下のものであった。「イングランド人の心の中にはスパイや裏切り者に対するきわめて健全な感情がある」から、パウエルの活動が不愉快なものと思われるのは避けがたいが、彼はあくまでも「悪の計画」を阻止する目的で活動したのである。「パウエルのことを裏切り者、スパイなどと呼ぶのではなく……彼に対して謝意を表明すべきである」。パウエルの証言がデイヴィスらのそれと矛盾していないという事情も、彼の証言に信憑性を認めるべき理由とされた。そして実際、「八月の陰謀」に関与した者たちへの有罪判決の最大の根拠になったのは、パウエルの証言であった。

「……情報の提供にあたって、金銭的な目的など持っていないかったと私は誓います。ただ我が国に奉仕するためだったのです」。しかし、パウエルが週一ポンドの報酬を受けていた事実も争われない。他のスパイのそれに比べてきわめて高額なこの報酬にも、彼は満足していなかった。「……私には以前の方が豊かに暮らしていました。私に支払われるのは僅かな額です。」結局、一八四九年には合計で四三〇ポンドに上る報酬がパウエルに与えられた。首都警察や内務省はそれほど彼の活動を高く評価していたのである。ジョンソンその他の偽名を利用した彼のスパイ活動は、同じくスパイであったデイヴィスにも見破られなかった。「……当時、私は彼の名がジョンソン以外のものであるとは知りませんでした。彼が警察と連絡をとっていることも、私は知りませんでした。」八月一四日、パウエルは偽名の使用を理由にスパイの嫌疑をかけられたが、「チャーティストと関係していることを友人に知られたくなかった」ためであるという言い訳で乗り切った。

パウエルに比べても「邪悪な点ではほんの僅か譲る

にすぎない」と言われるデイヴィスは、古書や中古家具を扱う商人であった。彼が地元グリニッジのチャーティスト組織に加入するのは一八四八年五月二四日のことであり、おそらくその直後にロンドン全体のチャーティスト代表者会議にも派遣されるようになるが、治安当局への情報提供は既に三月一二日以来行なわれていた。「私は……ただ情報を収集する目的でチャーティスト協会に加わったのです」。六月一二日を境に、デイヴィスの情報はチャーティストらの地下活動の核心に触れるようになる。この日から本格化した「陰謀」を準備する活動に参加しながら、彼は「八月の陰謀」直前まで情報を提供し続けた。こと情報提供に限る限り、デイヴィスの方がパウエルよりも継続的な努力を払ったと言えよう。また、扇動についても、デイヴィスが他のチャーティストにピストルを販売していたことが記録されている。⁽⁹⁾

「報酬を得るなどという目的はありませんでした。私はただ生命と財産を守りたいと望んだのです。」現実に自分は何の報酬も得ていないとデイヴィスは証言

しているが、報酬なしの状態に不満を抱いていたことは間違いない。「私は何回か、スパイの仕事を辞めたと思いますでしたが、警察の警視や警部は私にそうすることを許可しませんでした。」おそらくこうした不満を解消するため、彼の情報の価値を認めていた治安当局は、結局一五〇ポンドを彼に支払っている。しかし、パウエルと並んで法廷で証言を繰り返し、その結果スパイ活動の事実が広く知られることとなったデイヴィスは、地元での商売の続行が不可能な状態に陥った。身の安全を確保するためにグリニッジを離れることを余儀なくされたデイヴィスにとって、一五〇ポンドという報酬は決して満足できるものではなかった。⁽¹⁰⁾

パウエルとデイヴィスが継続的に情報を提供し、しかもかなり高額な報酬を受けていたこと、さらに彼らの情報が相互に矛盾していないことから考えて、これらの情報は概ね信頼しうると判断できる。以下、ら二名の情報は概ね信頼しうると判断できる。以下、本稿は、彼らのスパイ活動を跡づけながら、一八四八年のロンドンで展開されたチャーティストや、彼らに同調したコンフェデレートと呼ばれるアイルランド人

ナショナルリストの「陰謀」を目指す地下活動の実態の
説明を試みる。⁽¹¹⁾

第二節 ロンドンの「陰謀」(一)

合法的大衆運動としてのチャーティズムの立て直し
を凶ってNCA執行委員会が計画した一八四八年六月
一二日の全国一斉集会は、完全な失敗に終わった。五
月末にアイルランドの併合撤回運動の指導者ジョン・
ミッチェルが流刑に処されて以降、ロンドンをはじめ
イギリスの諸都市ではチャーティストやコンフェデリ
イトによる抗議行動が連日取り組まれたが、こうした
行動はしばしば警察との衝突に至った。フィジカル・
フォースの脅威が高まっていることを感じとった治安
当局は、六月一二日のロンドンでの集会開催を禁止し
た。六月一二日当日、ロンドンの集會会場に予定され
ていたビショップ・ボナーズ・フィールズは警察によ
って占拠され、チャーティストは集會を試みることにさ
えできなかつた。⁽¹²⁾ 六月六日にアーネスト・ジョーンズ
が逮捕され、オコナーが運動の前線を離れている中で、

当時おそらく最大の影響力を持っていたチャーティス
ト指導者はピーター・マリ・マクドゥアルだったが、
六月一二日を経験して、マクドゥアルを含む一部の戦
闘的なチャーティストは、合法的大衆運動の路線から
「陰謀」を目指す地下運動の路線に転じていった。

六月一二日当日の午後に関われたロンドンのチャー
ティスト代表者会議では、以下の重要な決定が下され
た。(一) 今後、野外での集會は開催しない。(二) 今
後の代表者会議は秘密会議とし、連日開催される。

(三) 「最後の闘い」のプランを作成するための小委員
会を設置する。「政府の虚をついて真夜中に決起すべ
きであり、決起の日は一〇日以内に訪れるだろう。」

(四) 各々の地域のチャーティストやコンフェデリ
イトのクラブ等のメンバーは今後一〇日間は連日結集し、
武装を急いで、いつでも「陰謀」に決起できる態勢を
敷く。議長を務めるマクドゥアルは語った。「今後の
我々の活動は全て厳密にブライヴエートなものとして
保持されることが必要となろう。：我々の活動は今や
陰謀の形態を採りつつある」。彼が機密保持を強調し

たのは、スパイの潜入への危機感が強まっていたためであった。「今後スパイが発見されるようなことがあれば、彼はその場で殺されるだろう。」実際には、この日の代表者会議にも二人のスパイが出席していた。一人はグリニッジ地域の代表委員であったデイヴィス、もう一人は『ノーザン・スター』(最も有力なチャーテイスト新聞)の通信員トマス・レディングである。地下活動路線への本格的転換の当初から、ロンドンにおける「陰謀」の準備は治安当局に把握されていたのである。⁽¹³⁾

翌一三日の代表者会議では、まず二名の代表委員、マンダー・メイとブルームがスパイとして告発され、追放された。続いて、前日の代表者会議で指名された四名(ヘンショウ、ピット、ハニボルド、パーシー)が「政府を転覆し、ロンドンを占領するプラン」を作成し、翌日の代表者会議に提出することが決定された。⁽¹⁴⁾ これら四名は、翌日の午前一〇時から開かれた代表者会議に、さっそく「陰謀」のプランを提示した。

「ロンドンの地図が示され、いくつかの異なる攻撃

プランがつけられました。プランの一つは、以下のようにバリケードを構築するというものでした。ストランドのニュー・チャーチ周辺から：ラドゲイト・ヒルへ、：チーフサイドから：バービカンへ、そこからオルダーズゲイト・ストリートを通ってクラークンウエルへ、さらにサフロン・ヒルを經由してハットン・ガーデン裏の通りへ、：そこからセント・ジャイルズ・チャーチまで行き、ドウルリー・レイン、ラッセル・ストリート、コヴェント・ガーデンを経てストランドへ戻る。」

バリケードの構築以外にも、「教会、劇場その他の公共建築物」の焼き討ち、銃砲店等の襲撃、といった行動が検討に付された。しかし、いかなる「陰謀」のプランを採用すべきかをめぐり、代表者会議は紛糾した。議長マクドゥアルは、午後八時にサザックのピアショップ「ロード・デンマン」で会議を再開することとし、一時休会を告げた。「ロード・デンマン」で再開される会議では、我々の決起——それは遅くとも金曜日か日曜日の夜には決行されねばならない——の計画につい

て通告するために、二人の代表委員をマンチェスター及びその他の地域に派遣することが検討されるだろう。こうして、六月一四日昼の段階では、一六日ないし一八日の決起に向けて「陰謀」の様々なプランが検討され、北イングランドにおける同種の活動との連絡も考慮されていた。⁽¹⁵⁾ところが、夜の代表者会議再開までに事態は思わぬ展開を見せる。

一四日午後八時半頃、「ロード・デンマン」で会議の再開を待っていた代表委員たちの許に、マクドゥアルからのメッセージが届いた。この日午前の代表者会議の後、NCA執行委員ジョン・マクロウの強い勧めに従って、NCA執行委員会の権限で代表者会議の解散が決定されたと言うのである。解散の理由としては、一四日午前以降に「何らかの秘密が漏れた」ことが挙げられている。おそらく、一二日以降の代表者会議にもスパイが出席していたことが判明したので、組織防衛のために代表者会議を解散するということであろう。しかし、スパイの潜入は既に一三日の代表者会議でも指摘されていたことである。代表委員たちが突然の解

散指令に納得するはずもなかった。さらに、「陰謀」のプランが存在し、その準備のために代表者会議が開かれていたという事実一切を今後は否定する、とマクドゥアルが伝えたことも、代表委員たちの反発を強めた。突然の解散決定とマクドゥアルの豹変に憤った彼らは、「各々の地域に戻り、自分たちがマクドゥアルにどのような扱われたかを地域のメンバーたちに伝え、今後チャーティスト運動とは一切関係を持たないように忠告するつもりである、との意向を表明」した。⁽¹⁶⁾

一四日深夜、デイヴィスとともにグリニッジへ戻った同地域のチャーティスト指導者ブライは、「陰謀」の準備に加わっていたことに危険を感じないかと水を向けるデイヴィスに対し、「我々を政府に売り、我々を裏切るために」何かを企んでいるのではなからうか、とマクドゥアルらへの不信感を表明している。マクドゥアル及びNCA執行委員会の権威失墜に伴って、これ以後の「陰謀」に向けたロンドンの地下活動は彼らとは関係を持たない、独自の運動になっていく。六月一二―四日の代表者会議の席上で印象に残った人物とし

て、デイヴィスはジョージ・ブリッジ・マリンズ（警察や軍隊に硝酸を投げつけることを提案した男）、ウィリアム・レイシー（「二三四日の…会議で最もアクティブだったメンバーの一人」）らの名を挙げているが、彼らは七月下旬以降の地下運動の第二波の最も重要な指導者となる。六月一四日の突然の解散指令を経験した彼らがNCA執行委員会と関係を持つとうとしなかつたのは、当然のことであつた。⁽¹⁷⁾

第三節 ロンドンの「陰謀」(二)

ロンドンで「陰謀」を策す者たちが再び会合を開くようになるのは、七月一〇日のことである。六月段階と同じく、こうした会合はチャーターティスト代表者会議という形式を採つた。七月一〇日はアーネスト・ジョーンズらの裁判が始まる日であり、代表者会議が召集された直接の目的は彼らの救出を検討することだった。救出は実際に試みられはしなかつたが、この日の会議が一つの契機となつて、「陰謀」の準備は再び本格化していった。⁽¹⁸⁾

七月二〇日の代表者会議には、クリップルゲイト地域の代表としてパウエルが初めて出席した。パウエルは回想する。

「クリップルゲイト地域のチャーターティスト協会には、地域の事柄についての指導機関として五人から成る評議会がありました。去る七月二〇日のチャーターティストの秘密委員会「代表者会議を指す」の会合に出席するように、私は評議会から指名を受けました：ペイン、ブリュスター、マリンズ、ダウリング、グリニッジ代表一人、…コンフェデレート・クラブ代表一人が出席していました〔厳密には、ウィリアム・オールナット、ジェイムズ・バセット、バティス、ブリュスター、ウィリアム・ダウリング、ジョージ・ブリッジ・マリンズ、ペイン、ジョン・ローズ、そしてデイヴィスとパウエル（ジョンソンを名乗る）を含む計一四名が出席していた〕。…この会合では、チャーターティスト運動を前進させるための五つの行動計画の作成を目的に、委員会を結成することが提案され、決定されました。委員会のメンバー

には、ペイン、ブリュスター、ローズ、マリンズ、
ダウリングが選出されました。⁽¹⁹⁾

こうして、代表者会議内に「陰謀」のプランの作成を
任務とする小委員会が設置され、ペインが議長を、マ
リンズが副議長及び財政を、ローズが書記を務めるこ
とになった。小委員会の五人のメンバーのうちでは、
アイルランド人ウィリアム・ダウリングに関する情報
が多い。事務弁護士の家庭に育った彼は当時二四歳の
肖像画家であり、六月中頃からソーホーのコンフェデ
レート組織デイヴィス・クラブの書記の任にあった。
チャーティストを中心とする「陰謀」の準備に関与し
ながらも、彼はあくまでも自己を「アイルランドのナ
ショナルリスト」と規定し、「イングランド社会を攪乱す
ることではなく、私自身の国を自由にすること」を自
らの課題としていた。また、ウェストミンスター・ホ
スピタルで働く二三歳の医学生マリンズは、パウエル
によれば、「あらゆる場面における第一のスポークスマ
ン」であった。⁽²⁰⁾

七月三〇日には、ブリュスターに代わってバセット

が小委員会に加わった。さらにその二日後、新たに四
人が小委員会のメンバーに選出されたが、注目すべき
ことに、ここで選出された四人(トマス・フェイ、ト
ンプソン、リンチ、ドノヴァン)は全員アイルランド
人であった。ダウリングを加え、これで小委員会内の
過半数をアイルランド人が占めることになったのであ
る。アイルランド人がロンドンの「陰謀」準備の中核
で多数派を形成したという事実は、地下活動に少な
からぬアイルランド人が参加していたことを、まず間違
いなく反映している。さらに、わざわざこの時期に多
くのアイルランド人を小委員会に加えた背景には、ア
イルランドにおけるコンフェデレイトの反乱にできれ
ば連携するかたちでロンドンの「陰謀」を決行したい
という期待があったと思われる。七月二九日のコンフ
エデレイトの「蜂起」は簡単に鎮圧されていたが、こ
の小委員会再編成の時点では、ロンドンの地下活動に
従事する者の多くが、アイルランドの反乱は遠からぬ
うちに拡大するものと考えていた。『スピリット・オ
ブ・ジ・エイジ』の次のような情勢認識を共有してい

た者は、少なくともなかったはずである。「諸日刊紙により、「アイルランドの」蜂起は既に鎮圧されたと我々は教えられている。…しかし：蜂起が鎮圧されたのであれば、なぜ我が国は依然として多くの軍隊をアイルランドに送り続けているのか？…なぜスミス・オブライエン「コンフェデレイトの最高指導者」や他の指導者たちは捕えられ、女王の監獄のどこかに囚われていないのか？ それは単に彼らの反乱が鎮圧されていないため、あるいは、実際には反乱がまだ完全には始められていないためであると我々は考える。」⁽²¹⁾

ロンドンで「陰謀」を指す者たちが連携したいと考えていたのは、アイルランドの反乱とだけではなかった。イギリスの他の諸都市、特に北イングランドのそれにおける同種の「陰謀」との連絡は、彼らにとって重要なテーマだった。八月四日の代表者会議は、早くに代表を北イングランドに派遣すべきであるという点で一致し、ウェストミンスターの「チャーター・コーヒー・ハウス」の経営者でもあった製靴工ウィリアム・レイシーが、翌朝ロンドンを発つてマンチェスター

ーへ向かった。⁽²²⁾

八月七日、ロンドンの新聞各紙は八月五日のスミス・オブライエンの逮捕を報道した。この日の代表者会議では、小委員会のメンバー九人全員の辞任が発表された。この措置が採られた理由として、パウエルは、「スミス・オブライエン逮捕の連絡」、そして「小委員会のアイルランド人、すなわちドノヴァン、フェイ、トンプソン、リンチを小委員会の残る多数派が信頼していなかったこと」の二点を挙げている。これら四人のアイルランド人は、「チャーティストとともにコンフェデレイトも正当に代表されるように」と小委員会に加えられたわけだが、ロンドンのチャーティストとコンフェデレイトとの間には不信任が残っていた。(パウエルの情報から判断する限り、ダウリングはチャーティストの側について。)コンフェデレイトの反乱の敗北が明らかとなった今、不信任を抑えてまで小委員会に多くのアイルランド人を参加させる必要は認められなかった。この日の代表者会議ではさっそく新しい五人の小委員会が選出されたが、そのメンバーは

ペイン、ローズ、マリンズ、ブリュスター、バセットであり、アイルランド人は含まれていなかった。⁽²³⁾ アイルランドの反乱が予想以上に簡単に挫折したことは、ロンドンの「陰謀」にとって重大な意味を持った。アイルランドの反乱が拡大し、イギリスの治安維持勢力に打撃を与えることを期待しながら検討されていた「陰謀」のプランは、八月七日を転機として、根本的な再検討に付されることとなったのである。こうした中、北イングランドの「陰謀」との連携には従来以上の期待がかけられた。⁽²⁴⁾

八月一日、小委員会の書記であるローズの家から、警察は地下活動に関する文書を押収した。その結果、一三日に延期された代表者会議では、ローズに代わって仕立工ウィリアム・カッフエイが小委員会に参加し、書記の任にあたることが決定された。一日以降、ローズは「陰謀」の準備のための会議には全く出席していない。さらに、新たにもう一人、ウォリーが小委員会のメンバーに選出された。⁽²⁵⁾

一三日の代表者会議をめぐってより重要だったのは、

レイシーによって北イングランドの「陰謀」に関する情報が伝えられたことである。レイシーからの書簡の趣旨は、デイヴィスによれば、「マンチェスターは月曜日〔八月一四日〕の夜に決起するという意味であると理解」された。レイシー自身も「おそらく月曜日の朝にはロンドンに戻っている」予定であった。数週間前にフランスから移ってきたばかりの煉瓦工ジョージ・リッチーは、ロンドンにはマンチェスターに呼応して決起しうる力があると強調した。「セント・ジャイルズのアイリッシュ・ブリゲイドには五〇〇名が結集している。そして：従来敢えて運動に登場してこなかった四〇〇名のフランス人が、我々が決起する時にはいつでも合流する準備を整えている。」何よりもまずマンチェスターからのより正確な知らせを待つべきであるという意見が多数を占め、次のような段取りが決定された。翌一四日、小委員会は全日にわたって会合し、レイシーの接触を待つ。代表者会議は午後六時からホウボーンのバブ「オレンジ・トゥリー」で開催される。そして、「一四日夜にマンチェスターで決

起が試みられる場合には、ロンドンも決起すべきであると結論⁽²⁶⁾された。

翌一四日、小委員会は朝にはロンドンに到着しているはずのレイシーからの連絡を待ったが、何の連絡もないうちに代表者会議の時間となった。会議では、いつでも「陰謀」を執行できるような臨戦態勢を敷くために、「出席している代表委員は皆、自らの地域に戻ったら即座に、決起の意志を持ち、指示があればすぐに要求されたどんなことでもする覚悟のできている信頼しうる人物を、四人から六人確保すること」が決定された。「バリケードの構築をはじめとする命がけの作業」が彼らの任務だった。続いて、各地域の武装状況に関する報告が小委員会に提出された。代表委員たちは午後一〇時まで「オレンジ・トゥリー」に残ったが、結局レイシーは現われず、ロンドンにおける決起も見合わされた。⁽²⁷⁾

一五日の夕方から「ロード・デンマン」で開かれていた代表者会議に、ようやくレイシーが姿を見せた。パウエルは証言する。「……一人の男が会議に現われ、

次のように述べました。自分はたった今北イングランドから戻ったばかりである。マンチェスター、バーミンガム、リヴァプールの者たちは既に決起し、闘っているか、あるいは今夜にでも決起するだろう。囚人レイシーこそがこの人物であり、彼は地方へ行くようにと指名された代表委員でした。」ここでレイシーが報告しているのは、八月一日のマンチェスターにおける代表者会議（レイシーをはじめ、マンチェスター、バーミンガム、リヴァプールの都市の活動家が出席）で合意された、これらの都市では八月一四日ないし一五日に「陰謀」を執行する、という結論であった。現実には、バーミンガムやリヴァプールでは「陰謀」の計画は具体化されず、マンチェスターの決起も事前に鎮圧されたわけだが、レイシーの報告を受けたロンドンの活動家たちは「陰謀」を執行する意志を改めて固めた。代表者会議は中断され、小委員会メンバーはレイシーと協議するために退席した。⁽²⁸⁾

協議の後、小委員会メンバーは「ロード・デンマン」に戻り、翌一六日夜の決起が正式に決定されたことを

代表者会議に伝えた。具体的には、ブリュスターの指揮によってクラークンウェル・グリーンを、ペインの指揮によってタワー・ハムレッツを、バセットの指揮によってウェストミンスターを、そしてマリンズの指揮によってセヴン・ダイアルズを攻撃する計画であり、マリルボン、パディントン、サマーズタウン、チェルシー等の活動家はセヴン・ダイアルズの行動に、またロンドン南部の活動家はウェストミンスターの行動に合流することとされた。続いてマリンズが、翌日の行動の段取りについて以下のように語った。代表委員の指導の下、各地域の活動家は午後八時までに武装し、地域の拠点に結集する。ロンドンの「陰謀」全体の司令部は「オレンジ・トゥリー」に置かれ、責任者はリッチーである。午後五時に各地域の任務の詳細がリッチーから最終的に伝えられる。各代表委員は「完全な信頼を置くことのできる」四―六人とともに、正確に午後五時に「オレンジ・トゥリー」を訪ねなければならぬ。各地域で出勤態勢を整えている活動家はリッチーからの指示を受け、午後九時二〇分までに自らの

行動地点に移動する。⁽²⁹⁾ こうして、六月二日以來準備されてきたロンドンの「陰謀」は、ついに決行の時を迎えた。

一六日当日のおそらく昼間に開かれた代表者会議の席上、パウエルは自分が二フィート以上の長さのある車輪付き大砲、そして相当量の火薬を持っていると言いつ出した。「これは嘘でした。代表委員たちのより強い信頼を得ようと、私はこんなことを言ったのです。」既に各地域の武装状況のチェックは一四日にすんでいたはずだったが、この発言は代表委員たちを喜ばせた。「陰謀」のプランがどこまで緻密に練られたものだったか、このエピソードからある程度は推察できるように思われる。午後六時、警察が「オレンジ・トゥリー」を急襲し、以下の一人が逮捕された。ジョウジフ・リッチー(煉瓦工、四二歳)、ジョン・シェパード(仕立工、三四歳)、ジェイムズ・スノウボール(大工、三二歳)、ジェイムズ・リチャードソン(大工、三〇歳)、ジョージ・グリーンズレイド(製靴工、三〇歳)、ヘンリー・スモール(大工、三一歳)、エドワー

ド・スコディング(旋盤工、二八歳)、ウイリアム・バーン(製靴工、四四歳)、アルフレッド・エイブル(運搬人、二三歳)、ウイリアム・ガーニー(製靴工、四二歳)、フィリップ・マーティン(新聞配達人、四五歳)。マリンス、ペイン、バセットらの指導者は、現場の指揮をとるため「オレンジ・トゥリー」を離れていた。これら一人一人に関して何よりも特徴的なのは、製靴工、仕立工、大工等、プロゼロが「首都におけるチャーティズムのバックボーン」と呼ぶ職人たちが多くを占めていることである。また、若年の者が少ないことも注目される。こうした特徴は、「八月の陰謀」に関与した者たちが、例えばこの年の三月六―八日のトラファルガー・スクエア暴動の参加者とは異なる階層の者たちであったことを示唆している。「少年たちのコックニー暴動」と呼ばれたトラファルガー・スクエア暴動の際の逮捕者のうち、約九三%は三〇歳以下(約五二%は二〇歳以下)だったのであり、特定の職種への集中も見られなかった。暴動や騒乱の担い手と「陰謀」の担い手は、おそらく全く別種の者たちだったの

である。⁽³⁰⁾ 同じく一六日の午後九時には、サザックのバブ「エンジェル」で武装した一三人のグループが逮捕された。さらに、「陰謀」の四つの攻撃地点の一つであるセヴン・ダイアルズには、午後九時半頃、武器を手にした群衆が集まったが、彼らは警察によって簡単に四散させられた。他の三つの予定された攻撃地点では、結局何の具体的な行動も試みられなかった。主たる指導者も、概ね八月二〇日までに逮捕された。⁽³¹⁾ パウエルやデイヴィスから充分な情報を得ていた治安当局は、余裕をもって「八月の陰謀」を粉砕したのである。

むすび

「八月の陰謀」の中心人物の多くは、早くも九月に法廷に登場した(主要な例外は一月に裁かれたマリンス)。彼らの裁判にあたって最も重要な証言となったパウエルとデイヴィス、特に前者のそれは、前述したようなその信憑性に関する強い疑問の声にもかかわらず、大筋として判事や陪審員によって採用された。「ノーザン・スター」は、「陰謀」はパウエルをはじめ

とするスパイの扇動の所産であり、「陰謀」の責任を最終的に負うべきなのはスパイの雇用者たる内務省であると主張した。また、カッフエイは法廷において以下のように述べた。「…政府を、そして法務長官を、私は哀れだと思う。法務長官はスパイ長官と呼ばれるべきである。スパイを利用することは政府にとって恥辱だが、このような手段を用いてのみ政府は存続しうるのである。」しかし結局、スパイの証言を重要な根拠として、「八月の陰謀」の首謀者たちには厳しい量刑、具体的には、リッチー、レイシー、フェイ、カッフエイ、ダウリング、マリNZに終身流刑、彼ら以外の一二人に二年間の投獄、三人に一八ヶ月間の投獄が課せられた。⁽³²⁾

法廷における証言によってスパイとしての自らの活動を周知のものとしたパウエルとデイヴィスは、チャーティズムの支持者をはじめとする少なからぬ人々の憎悪の対象となった。既に述べた通り、グリニッジでの商売を断念したデイヴィスはその後サウサンプトンに移った。一八四九年のコレラ流行で妻を失った彼の

許には三人の子供が残された。報酬の上積みを求めるデイヴィスの要請を、内務省は受け入れなかった。一方パウエルは、一八四九年の中頃、内務省の負担でオーストラリアに移住した。しかし、オーストラリアにはチャーティズムと関係していた移民や流刑者、あるいはパウエル同様にスパイ活動に従事した過去を持つ者が少なくなかった。安定した職を得ることに失敗したパウエルは一八五二年四月にオーストラリアを離れ、イギリスへ向かった。その後の彼は、フロストによれば、「自分は「一八四八年に」『社会を救った』、そしてその社会は自分に対して充分に感謝の意を表していないと…不満を並べて明け暮れる男であった。」⁽³³⁾

一八四八年のロンドンにおいてスパイ・システムは成功したとベルチェムが論ずる時、何よりも念頭に置かれているのは情報提供者としてのスパイの機能である。パウエルやデイヴィスは詳細で概ね正確なロンドンの「陰謀」についての情報を提供して、治安維持に大いに貢献したとベルチェムは解釈する。チャーティズムの時代の治安維持政策に関するその先駆的研究の

中で、メイザーはスパイの利用に伴う危険性を二点指摘しているが、その第一はスパイの情報が往々にして根拠もなく危機を誇張することである。自らの情報が実際以上に重要であると思わせるために、そしてスパイとしての自らの存在が不可欠であると印象づけるために、スパイの多くがこうしたセンセイショナルリズムの傾向を持った。トムスンもスパイたちの「自らの報告をセンセイショナル化する職業的バイアス」に言及しているが、彼は続けて次のように述べる。「……この事実はいまにしばしば見落とされているのだが、スパイの雇用者たちも間抜けではなかった。彼らはこのバイアスについてよく認識していた。……彼らはしばしば、情報を点検するための手段として、一人より多くの内通者（互いに知らない）を雇用して用心した。」この点は一八四八年のロンドンにも該当する。パウエルとデイヴィスは互いに相手がスパイであることを知らされないまま活動したわけだが、両者の提供する情報の中に本質的な矛盾はなかった。彼らの情報は概ね正確と言ってよかったのである。そうでなければ、治

安当局が長期間にわたって彼らを雇用し、相当額の報酬を与えている事実が説明できない。逆に、例えば、パタスンのそのような、いたずらに危機を強調するばかりの情報はほとんど顧慮されなかった。

メイザーが指摘する第二点は、「スパイが暴力や反乱の扇動者になるかもしれない」ことである。活動家の信頼を得るために、スパイは暴力行使も辞さないとの決意表明や扇動的発言で活動への熱意を示そうとしたし、また、「陰謀」そのものがなくなればスパイの存在理由も同時になくなってしまうから、自らの収入の源泉を温存するためにも、スパイは扇動に力を入れた。問題は、こうした扇動が実際に治安当局の脅威となるような事態を誘発する危険性だった。パウエルは扇動で悪名が高い。しかし、彼の扇動がなければ「八月の陰謀」そのものが試みられなかったはずである、という『ノーザン・スター』の議論は成立しない。彼の扇動が「陰謀」の準備に関与する者たちの戦闘的気分を高め、「陰謀」の成功についての楽観論を導いたことは事実であろうが、「陰謀」へ向けての地下活動の基本的

方針は大きく左右されはしなかった。また、「八月の陰謀」とは別個の暴力行使等が彼の扇動によって誘発され、治安当局に脅威を与えることもなかった。メイザールの言う第二の危険性も、一八四八年のロンドンでは回避されたのである⁽³⁵⁾。

以上二点は情報提供及び扇動というスパイの二つの機能に各々関するものであるが、スパイにはもう一つの重要な機能があった。すなわち、スパイの潜入が活動家の間に疑心暗鬼を呼び起こし、結果的に運動や組織に打撃を与えることである。この年のロンドンの地下活動では、スパイへの警戒を強めるべきことがしばしば指示されたが、誰がスパイであるかを見破るのが難しい状況の中、こうした指示は相互不信を招くばかりだった。パウエルは証言する。「クリップルゲイトのチャーティストが同僚のメンバーの大半をスパイではないかと疑っていることを知って、私は驚いたものです。」根強い相互不信の存在が「陰謀」を目指す地下活動を弱体化したとしても、それは不思議なことではない。スパイの潜入は、こうして運動や組織を蝕む機

能を持っていた。以上三つの機能に関して、一八四八年のロンドンにおけるスパイ・システムは確かに成功したと結論できる。そして、治安維持に際してスパイが重要な役割を担ったという事実は、一八四八年の時点において統治が依然として強圧的性格を色濃く残していたことを示す一つの有力な事例と言えよう⁽³⁶⁾。

(1) *Northern Star* [NI-NS], 30 Sept. 1848; J. C. Belchem, 'The Spy-System in 1848: Chartists and Informers - an Australian Connection', *Labour History*, no. 39, Nov. 1980, pp. 16-8; Thomas Frost, *Forty Years' Recollections*, London, 1880, rpt. New York, 1986, p. 150; Robert George Gammage, *The History of the Chartist Movement*, London, 1854-5, rpt. 1969, p. 338; F. C. Mather, *Public Order in the Age of the Chartists*, Manchester, 1959, pp. 198-9; Leon Radzinowicz, 'New Departures in Maintaining Public Order in the Face of Chartist Disturbances', *Cambridge Law Journal*, 1960, p. 58; E. P. Thompson, *The Making of the English Working Class*, London, 1963, rpt. 1982, pp. 532-3.

- (25) John Paterson to Sir George Grey, 26 April, 27 May 1848; Paterson to the Duke of Wellington, 7, 13, 26, 28, 29, 31 July 1848; Paterson to Spencer Horatio Walpole, n. d. [1852], MPEPO 2/62; Evidence of Charles Tilden, at the Central Criminal Court [274 CCC.], Oct. Session 1848, TS 11/139/381; NS, 30 Sept., 7 Oct. 1848; Belchem, *loc. cit.*, pp. 16-7; Mather, *op. cit.*, p. 207, p. 211. 『44年』本館に収用された手紙類は全部ロンドン公認チャリットマン・コロー・ホノヤム所蔵のものが多く。
- (26) Evidence of Thomas Powell, at the Police Court [274 PC.], on 19 Aug. 1848, TS 11/142/389; Evidence of Thomas Powell, at CCC., 18-19 Sept. 1848, TS 11/136/372; NS, 26 Aug., 30 Sept. 1848; Gammage, *op. cit.*, p. 339.
- (27) Evidence of Thomas Powell, at CCC., 18-19 Sept. 1848, TS 11/136/372; NS, 26 Aug., 30 Sept., 7 Oct. 1848; Mather, *op. cit.*, pp. 210-1.
- (28) Evidence of James Paris and of Thomas Osborne, at CCC., Oct. Session 1848, TS 11/140/387; NS, 26 Aug., 30 Sept., 7 Oct. 1848; John Saville, 1848: *the British State and the Chartist Movement*, Cambridge, 1987, pp. 185-6.
- (29) Evidence of Thomas Powell, at CCC., 18-19 Sept. 1848, TS 11/136/372; NS, 26 Aug., 30 Sept. 1848; Belchem, *loc. cit.*, pp. 16-7.
- (30) Evidence of George Davis, at CCC., 18-19 Sept. 1848, TS 11/136/372; NS, 30 Sept. 1848; Belchem, *loc. cit.*, pp. 16-7; Gammage, *op. cit.*, p. 339.
- (31) 11年のチャリティスト運動及びロンドンチャリットマン協会の運動の併合撤回運動全般にわたって『47年』John Belchem, 1848: 'Feargus O'Connor and the Collapse of the Mass Platform', James Epstein & Dorothy Thompson (eds.), *The Chartist Experience*, London, 1982; Kevin Nowlan, *The Poli-*
- (32) Evidence of George Davis, at CCC., 18-19 Sept. 1848, TS 11/136/372; NS, 30 Sept. 1848; Belchem, *loc. cit.*, pp. 16-7.
- (33) Reports of R. Division, 1, 10, 12, 13, 14 June 1848, HO 45/2410A; NS, 30 Sept. 1848; 拙稿『一八四八年のチャリットマン運動と移民——ロンドンを中心として——』『歴史学研究』五九〇号、一九八九年二月。

- 2410A; Goodway, *op. cit.*, p. 92.
- (26) Report of R. Division, 14 Aug. 1848, HO 45/2410A; Goodway, *op. cit.*, p. 93.
- (27) *Ibid.*, Evidence of Thomas Powell, at PC, on 19 Aug. 1848, TS 11/142/389.
- (28) Evidence of Thomas Powell, at PC, on 19 & 31 Aug. 1848, TS 11/142/389; Goodway, *op. cit.*, p. 93; Lowe, *loc. cit.*, pp. 189-90; 拙稿「一八四八年、リネマンのマイネラント人と実力行使の脅威」『西洋史学』一五七号、一九九〇年六月。
- (29) Evidence of Thomas Powell, at PC, on 19 Aug. 1848, TS 11/142/389; NS, 30 Sept. 1848; Goodway, *op. cit.*, p. 93, p. 125.
- (30) *Ibid.*; Names of Persons Apprehended at the Orange Tree Public House on Wednesday the 16th August, TS 11/142/389; Iorwerth Prothero, 'London Chartism and the Trades', *Economic History Review*, vol. XXIV, no. 2, 1971, p. 207.
- (31) Evidence of Charles Frederick Chubbe, at CCC, 18-19 Sept. 1848, TS 11/136/372; Evidence of Thomas Pronger and of William B. Cross, at CCC, Oct. Session 1848, TS 11/139/381; Evidence of Joseph Thompson, TS 11/142/389; Frost, *op. cit.*, p. 165;

- Goodway, *op. cit.*, p. 93; Saville, *op. cit.*, pp. 161-2.
- (32) NS, 26 Aug., 30 Sept. 1848; Gammage, *op. cit.*, pp. 338-40; Goodway, *op. cit.*, pp. 93-4; Saville, *op. cit.*, pp. 185-6.
- (33) NS, 7 Oct. 1848; Belchem, 'Chartist Informers in Australia', pp. 83-7; Frost, *op. cit.*, p. 167; Mather, *Chartism and Society*, p. 168; Weisser, *op. cit.*, p. 264. 一八五〇年三月、デイヴィスの隣人であったメンディストの聖職者ジョン・ノールズは、「報酬要求をめぐるデイヴィスト内務省との交渉の仲介をサウサンプトン市長リチャード・マンドルースに依頼したが、「スパイにははたと向ふシン・ンシーを感じることをかぎせよ」とするマンドルースは「デイヴィスのために尽力しようとはしなかった。」
- (34) 従来信頼できなりとされてきたスパイ情報の資料価値に光をあびたことは、トムソンの功績の一つである。スパイ情報への注目を通じて、イギリスにおける地下の革命的伝統が評価されることとなった。Clive Emsley, *Crime and Society in England, 1750-1900*, London, 1987, p. 191; John Stevenson, *Popular Disturbances in England, 1700-1870*, New York, 1979, pp. 12-3; Belchem, 'The Spy-System in 1848', pp. 15-8; Mather, *Public Order in the Age of the Char-*

- isis*, p. 208; Thompson, *op. cit.*, pp. 529-42.
(15) *NS*, 26 Aug., 30 Sept. 1848; Mather, *Public Order in the Age of the Chartists*, p. 209.
(16) Evidence of Thomas Powell, at CCC., 18-19

Sept. 1848, TS II/136/372. 一八四八年の統治政策全体の基本的性格については、別稿を用意したい。
(東京農工大学専任講師)